

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：13601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885042

研究課題名(和文) 大学生の過敏型自己愛傾向の変容要因・変容プロセスの実証的研究

研究課題名(英文) Empirical Research on Transformative Factors and a Transformative Process
Concerning Hypervigilant Narcissism in University Students

研究代表者

神谷 真由美 (KOYA, Mayumi)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・講師

研究者番号：70710078

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では大学生を対象に、2回の質問紙調査と面接調査を行い、大学生の過敏型自己愛傾向の変容の要因と、そのプロセスを明らかにすることを目的とした。過敏型自己愛傾向に改善がみられた大学生に対して、面接調査を行ったところ、友人関係、家族関係、学業、アルバイトなど様々な状況で、価値観の広がりを感じられる経験をしていた。この経験を通じて、過敏型自己愛傾向の特徴の一つである、他者からの評価への過敏さが改善していくプロセスが示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research was aimed at clarifying the transformative factors and a transformative process concerning hypervigilant narcissism within a group of university students. Two questionnaires and the interview survey were taken. Students who showed an amelioration of hypervigilant narcissism after the interview surveys had experienced feeling an expanded sense of values under various circumstances involving school work, part-time jobs, and their relationships with friends and family members. One of the characteristics of hypervigilant narcissism is an over-sensitivity to evaluation and approval by other people. This research has suggested a process for ameliorating this over-sensitivity through the aforementioned type of experience.

研究分野：臨床心理学

キーワード：自己愛 過敏型自己愛傾向 青年期 縦断研究 質的研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 大学生の自己愛に関する心理学的研究
近年、多くの大学で、抑うつ状態や引きこもり、暴力といった困難な問題を抱える大学生が増加している (例えば、苦米地, 2006)。これらの問題の根底には、自己愛の歪みや傷つきがあるとされている (川崎, 2011)。現在、自己愛研究においては、自己愛傾向を誇大型と過敏型の2類型から捉える視点が注目されている (表1)。しかし、わが国においては、文化的背景から、この2類型のうち過敏型自己愛傾向が表れやすく、不適応の指標とも関連がみられている (Ronningstam, 2005; 清水・岡村, 2010)。

表1 2つの自己愛傾向

	誇大型 自己愛傾向	過敏型 自己愛傾向
対人関係上 の特徴 (Gabbard, 1994)	他の人々の反応に気づかず鈍感 傲慢で攻撃的	他の人々の反応に過敏で傷つき やすい、抑制的
日本での 出現状況	表れにくい	表れやすい
適応 (精神的 健康など) との関連	適応の指標と 関連	不適応の指標と 関連

また先行研究では、過敏型自己愛傾向を測定する際に、包括的に捉えていたり、対人恐怖傾向を用いて捉えており、わが国で問題となっている過敏型自己愛傾向を詳細に捉えた研究は乏しい。そのため、困難な問題を抱える大学生の増加に加え、大学教育の質の向上が求められている現在、大学生の過敏型自己愛傾向への心理学的理解、心理的支援は喫緊の課題である。

(2) 過敏型自己愛傾向の縦断研究

大学生が自らの過敏型自己愛傾向の問題をどのように克服していくのかという縦断研究は、国内においては事例研究 (例えば、吉井, 2007) にとどまる。国外では大規模な縦断研究 (Wink, 1992) もみられるが、過敏型自己愛傾向が変容する要因やプロセスについては、実証的に明らかにされていない。以上のような研究状況に対して、大学生を対象に個人の過敏型自己愛傾向の変容と、そのプロセスを検討する心理学的研究を行う必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学生の過敏型自己愛傾向の変容過程に着目し、過敏型自己愛傾向が改善していくプロセスを明らかにすることである。これより、困難な問題を抱える大学生のみならず、大学生全般が充実した大学生活を送るために必要である健康な自己愛の促進に、臨床心理学の観点から具体的な支援方法の提案が可能となるであろう。

3. 研究の方法

2回の質問紙調査 (Time1, Time2) と、面接調査を実施した。なお、本研究は信州大学のヒトを対象とした研究に関する倫理委員会から承認を得ている。

(1) 質問紙調査 (Time1)

調査対象者：大学生 556 名 (男性 331 名, 女性 225 名) であった。平均年齢 19.11 歳, 標準偏差 1.54 歳であった。

調査内容：過敏型自己愛傾向：自己愛的脆弱性尺度短縮版 (以下, NVS 短縮版; 上地・宮下, 2009) を使用した。本尺度は、「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」の4下位尺度から構成される。回答は5段階評定で、得点が高いほどその傾向が強いことを示す。フェイス項目：性別、年齢、学年、学部を尋ねた。質問紙調査 (Time2) の協力依頼：本研究の主旨を説明し、質問紙調査 (Time2) に協力いただける場合には、質問紙郵送のための氏名と住所の記入を依頼した。

(2) 質問紙調査 (Time2)

質問紙調査 (Time1) 実施から6カ月後に郵送法により実施した。

調査対象者：大学生 272 名 (男性 163 名, 女性 109 名) であった。平均年齢 19.40 歳, 標準偏差 1.01 歳であった。

調査内容：過敏型自己愛傾向：質問紙調査 (Time1) と同様、NVS 短縮版 (上地・宮下, 2009) を使用した。ライフイベント：対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) (高比良, 1998) を使用した。本尺度は、「NLE—対人」「NLE—達成」「PLE—対人」「PLE—達成」の4下位尺度から構成される。回答は「経験した」「経験しない」の2段階評定で行った。大学生生活の充実度：大学生生活充実度尺度短縮版 (奥田他, 2010) を使用した。本尺度は、「大学へのコミットメント」「交友満足」「学業満足」「不安のなさ」の4下位尺度から構成される。回答は5段階評定で、得点が高いほどその傾向が強いことを示す。フェイス項目：性別、年齢、学年、学部を尋ねた。面接調査の協力依頼：本研究の主旨を説明し、面接調査に協力していただける場合には、メールアドレスの記入を依頼した。

(3) 面接調査

調査対象者：過敏型自己愛傾向に低下がみられた大学生 11 名 (男性 3 名, 女性 8 名), 平均年齢 19.91 歳, 標準偏差 0.79 歳であった。過敏型自己愛傾向の低下の基準は、質問紙調査 (Time1, Time2) の NVS 短縮版の総得点を比較し、Time2 の NVS 総得点から Time1 の NVS 総得点を引いた得点 (以下, NVS 総得点変化量と示す) が、-5 点以下であることとした。11 名の NVS 総得点変化量の平均値は

- 11.64 点であり、範囲は - 30 点 ~ - 5 点であった。

調査方法：1 時間 ~ 2 時間の半構造化面接を行った。

調査内容：調査対象者個人の質問紙調査 (Time1, Time2) での過敏型自己愛傾向の低下を説明し、低下に関して思い当たるエピソードとエピソードの詳細、エピソード前後での心理的变化、思い当たるエピソードがない場合は、Time1 からの生活状況や心理的变化、Time1 以前の過敏型自己愛傾向の特徴について尋ねた。

4. 研究成果

分析は、2 回の質問紙調査 (Time1, Time2) とも回答が認められた 273 名のデータを用いた。

(1) 記述統計

過敏型自己愛傾向、ライフイベント、大学生活の充実度の平均値、標準偏差を表 2, 3 に示す。

表 2 過敏型自己愛傾向の平均値、標準偏差

	M	SD
NVS 短縮版 (Time1)		
自己顕示抑制	16.99	4.38
自己緩和不全	14.13	5.00
潜在的特権意識	6.65	1.56
承認・賞賛過敏性	15.07	4.69
NVS 総得点	52.84	10.89
NVS 短縮版 (Time2)		
自己顕示抑制	16.60	4.01
自己緩和不全	14.79	5.14
潜在的特権意識	12.87	3.61
承認・賞賛過敏性	15.07	4.40
NVS 総得点	59.33	12.31

表 3 ライフイベント、大学生活の充実度の平均値、標準偏差

	M	SD
ライフイベント		
NLE 対人	20.90	3.37
NLE 達成	22.07	3.10
NLE 合計	42.97	5.58
PLE 対人	24.06	3.20
PLE 達成	23.25	3.51
PLE 合計	47.33	5.75
大学生活の充実度		
大学へのコミットメント	18.56	3.80
交友満足	22.10	5.03
学業満足	16.91	4.04
不安のなさ	12.78	4.03
充実度総得点	70.35	12.13

(2) 過敏型自己愛傾向の変容

過敏型自己愛傾向の変容を検討するため、2 回の質問紙調査 (Time1, Time2) における NVS 短縮版の得点に対し、対応のある *t* 検定を行った。自己緩和不全、潜在的特権意識、総得点は、Time2 の得点が Time1 の得点よりも有意に高かった (順に、 $t(271)=2.48, 28.42, 12.22, p<.05, .001, .001$)。自己顕示抑制は、

Time2 の得点が Time1 の得点よりも低い傾向がみられた ($t(271)=1.96, p<.10$)。承認・賞賛過敏性は、有意差が認められなかった ($t(271)=.02, n.s.$)。

(3) 過敏型自己愛傾向の変容とライフイベント、大学生生活の充実度との関連

質問紙調査 (Time1, Time2) の NVS 短縮版の各下位尺度得点、総得点について、Time2 の得点から Time1 の得点を引いた得点を変化量として算出した。各変化量の平均値 (標準偏差) は、自己顕示抑制変化量は - 0.39 (3.28)、自己緩和不全変化量は 0.66 (4.37)、潜在的特権意識は 6.22 (3.61)、承認・賞賛過敏性は 0.00 (3.56)、NVS 総得点変化量は 6.50 (8.77) であった。

NVS 短縮版の変化量とライフイベント：対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用)、大学生活充実度尺度短縮版との相関係数を算出した (表 4, 5)。その結果、有意な相関はいくつか認められたが、相関係数の値は小さく、相関はほとんどみられなかった。

表 4 過敏型自己愛傾向の変化量とライフイベントとの関連

	NLE-対人	NLE-達成	NLE-合計	PLE-対人	PLE-達成	PLE-合計
自己顕示抑制変化量	-.05	-.04	-.06	-.08	-.14*	-.14*
自己緩和不全変化量	.15*	.10	.15*	.10	.01	.06
潜在的特権意識変化量	.08	.15*	.03*	.07	.01	.04
承認・賞賛過敏性変化量	-.05	-.08	-.07	.01	-.09	-.52
NVS 総得点変化量	.07	.07	.08	.05	-.08	-.03

* $p<.05$

表 5 過敏型自己愛傾向の変化量と大学生活充実度との関連

	コミットメント	交友満足	学業満足	不安のなさ	充実度総得点
自己顕示抑制変化量	-.06	-.11	-.09	.05	-.08
自己緩和不全変化量	.04	-.02	.07	.04	.04
潜在的特権意識変化量	.01	-.14*	-.09	-.17**	-.14*
承認・賞賛過敏性変化量	-.09	-.07	-.05	-.04	-.09
NVS 総得点変化量	-.04	-.14*	-.06	-.04	-.10

** $p<.01, *$ $p<.05$

次に、NVS 総得点変化量によって、対象者を過敏型自己愛傾向の低下群と増加群に分類した。NVS 総得点変化量がマイナスを示す対象者 58 名を低下群とした。一方、NVS 総得点変化量が 13 以上を示す対象者 61 名を上昇群とした。両群の NVS 総得点変化量の平均値 (標準偏差) は、低下群は - 5.21 (3.87)、上昇群は 17.87 (5.78) であった。*t* 検定により、両群のライフイベント、大学生活充実度の平

均値の比較を行った。その結果、有意差は認められなかったが、ライフイベントのうちNLE合計、大学生生活充実度のうち交友満足に有意傾向が認められた(順に、 $t(117) = -1.77, 1.69, p < .10$)。NLE合計は、低下群($M=42.52$)が上昇群($M=44.31$)より低い傾向があった。交友満足は、低下群($M=22.86$)が上昇群($M=21.16$)より高い傾向があった。

(4) 過敏型自己愛傾向の変容のプロセス
面接調査で語られた、対象者が過敏型自己愛傾向の低下と関連すると考えるエピソードを表6に示す。

表6 対象者の過敏型自己愛傾向の低下と関連すると考えられるエピソード

対象者	性別	年齢	NVS 総合点 変化量	過敏型自己愛傾向の 低下に関連すると 考えるエピソード
A	女	21	-6	友人関係
B	男	19	-7	部活, 友人関係
C	男	20	-16	学業, 部活, 家族関係
D	女	21	-5	学業, 友人関係
E	女	21	-30	学業, 部活
F	女	20	-5	学業, 友人関係
G	女	19	-6	アルバイト, 友人関係
H	女	20	-13	入院, 友人関係
I	女	19	-23	学業, 友人関係
J	女	19	-8	アルバイト, 友人関係
K	男	20	-9	学業, 友人関係

面接調査の結果、対象者は、友人関係、家族関係、学業、部活、アルバイトなど様々な状況での体験を、過敏型自己愛傾向の低下と関連するエピソードとして挙げていた。これらのエピソードに関する詳細な語りから、対象者は価値観の広がりを感じていることが明らかとなった。価値観の広がりを感じたことで、過敏型自己愛傾向の特徴である、他者からの評価への過敏さが低下するプロセスが示唆された。

(5) まとめ

本研究は、大学生の過敏型自己愛傾向の変容過程に着目し、過敏型自己愛傾向が低下していくプロセスを明らかにすることを目的とした。質問紙調査の結果、過敏型自己愛傾向の低下には交友満足の高さが、増加にはネガティブなライフイベント体験の多さが関連する傾向がみられた。過敏型自己愛傾向が低下した大学生に面接調査を行った結果、価値観の広がりを感じたことで、他者からの評価への過敏さが低下するプロセスが示唆された。以上から、大学生の過敏型自己愛傾向の低下には、大学生生活のなかで生じる様々な経験を内省し、対象者自身の価値観を広げ、満足できる対人関係を築くことが重要であると推察される。今後は対人関係や価値観の

広がりという視点から、過敏型自己愛傾向の変容要因を詳細に検討する必要がある。

引用文献

- Gabbard, G. O. (1994). *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM- edition*. Washington, DC: American Psychiatric Press.
(ギャバード, G. O. 館 哲朗 (監訳) (1997). 精神力学的精神医学 その臨床実践 [DSM- 版] 臨床編 軸障害 岩崎学術出版社)
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- 川崎直樹 (2011). 自己愛の心理学的研究の歴史 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学 概念・測定・パーソナリティ・対人関係 金子書房 pp. 2-21.
- 奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2010). 大学生生活充実感に関する研究 (1) ——4 年度分の調査データに基づく大学生生活充実度尺度の短縮版の作成—— 日本心理学会日本心理学会第 74 回大会発表論文集, 1212.
- Ronningstam, E. F. (2005). *Identify and understanding the narcissistic personality*. New York: Oxford University Press.
- 清水健司・岡村寿代 (2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2 次元モデルにおける認知特性の検討 ——対人恐怖と社会恐怖の異同を通して—— 教育心理学研究, 58, 23-33.
- 高比良美詠子 (1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14 (1), 12-24.
- 苔米地憲昭 (2006). 大学生——学生相談から見た最近の事情—— 臨床心理学, 6 (2), 168-172.
- Wink, P. (1992). Three types of narcissism in women from college to mid-life. *Journal of Personality*, 60 (1), 7-30.
- 吉井健治 (2007). 過敏型自己愛人格傾向の青年の事例——自己の傷つきの再体験への恐れ—— カウンセリング研究, 40 (4), 306-315.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

神谷真由美 大学生の過敏型自己愛傾向とライフイベント, 大学生生活充実度との関連 日本発達心理学会第 26 回大会, 2015 年 3 月 21 日, 東京大学本郷キャンパス (東京都文京区)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神谷 真由美 (KOYA, Mayumi)
信州大学・学術研究院総合人間科学系・講師
研究者番号: 70710078